

〔目的〕前回の発表において、19世紀後半におけるアメリカの紳士衣服産業の生産高の推移と衣服の価格の推移を比較することによって、1890年から1900年にかけて高級な衣服を作るテーラーと既製服産業が共に発達していたことを報告した。この事実の要因として、上記の2形態の衣服産業で作られた衣服の購入層の違いが存在したと推察される。そこで今回は、階級による注文仕立服と既製服への考え方の差異について考察する。

〔方法〕注文仕立服と既製服の服種、デザイン、色彩、サイズ、素材、製造方法に着目し「The New York Times」紙の広告を収集し分類した。更に、着装状況を検討するため Harper's Weekly 等のエッチングや写真を収集し検討した。また、服飾感を考察するため、James F. Cooper や Andrew Carnegie 等の当時の著書数件を参考にした。

〔結果〕19世紀前半まで、紳士服におけるモードは注文仕立服を購入できた上流階級のものであった。しかし、既製服産業の発達にともない、ビジネススーツなどこれまでよりも安価なスーツが販売されるようになり、ブルジョワ階級や、また、彼らよりも下層の人々も衣服を購入できるようになった。この事によって、19世紀後半のアメリカの紳士服のスタイルは、均一化に向かった。既製服の中で同じ価格層に含まれるものは、ほんの少し他と違うデザインや素材であることによってその目新しさを競い、また、上流階級向けの注文仕立て服では、布地や仕立ての良さ等が重視されるようになった。このように一見、均一なデザインにおける差別化がこの時期の特徴であり、この事が、2形態の衣服産業の競合と共存を引き起こしたと言える。